

## 樂しき志向の体育授業を求めて

—その1—

小 倉 美津子

体育に関しては、社会教育、学校教育を問わず、戦後において急速に進歩した教育領域と言われている。特に昭和39年に開催されたオリンピック東京大会を大きな節目として、その様相が大きく変化してきたと評されている。

先ず学校教育においては、旧来「教科体育」を中心に、学校行事で一部体育的な学習指導程度に止まっていた状況であったが、昭和43年改訂の小学校学習指導要領では、総則に「体育」をそう入し、学校教育の全体で体力の向上を配慮した学習指導を展開することとなった。このことは、知育、徳育、体育の教育の原点をおさえたものとして高く評価されるとともに、この体力づくりを進める上で、より楽しくより効果的な学習指導の展開をするための指導法研究が要求されたとも言えた。このため、体育に関する学習指導の効果的なあり方を求めて、実践、研究、そして実践が重ねられ、多くの実践・研究の成果が発表されている。

一方、社会においても体育・スポーツのもつ諸機能が見直され、体育・スポーツ活動のもつ機能を楽しもうとの期待の高まりと共に、その愛好者が漸増した。これらの活動も健康、体力の保持増進→楽しみへと意識の移行

をしながら、今日の状況になっていると言えよう。昨今のジョギング、ゲートボール、エアロビクスダンス、ジャズダンス、太極拳等々のブーム的普及の実態も、意識パターンとしては前進したものと同様だと言えるが、最近のスポーツに関する意識調査によると、徐々にではあるが、楽しみ志向が強くなっているとも言われている。この発火点となったのは、東京オリンピックにおける惨敗がわが国民の体力の欠如に起因しているという分析結果と、女子バレーボールの優勝が引き金となって爆発的なブームの様相を呈したママさんバレーボールの振興とを掲げることができた。即ちママさんバレーボールの振興により、旧来体育・スポーツ活動に疎遠であった家庭婦人層が、その活動を通して体育・スポーツ活動の良さを見直すとともに、特に「楽しさ」を中心に据えて仲間の増大を図ってきたことが一つの証と言える。また、わが国民の体力の低さの指摘が、個々人の体力の低下現象への警鐘を引きだし、この警鐘が個々人の自覚をうながすこととなり、体力の保持増進を心がけさせることとなったことも事実であらう。

以上述べてきた諸事象やその他ファッショニ性、バイタルスポーツの誕生、健全なレクリエーション志向などが相乗的に働き合い、体育・スポーツ活動は素晴らしい振興をみたところである。なお、この振興の実態の中に一貫して求められているのは、これら諸活動が内包する楽しさにあることは言を待たないと言えよう。

このように、学校教育、社会体育とも、素晴らしい振興、充実をみたのは、教育としての理念や生涯的課題としての健康・体力の保持増進への挑戦などを目標としながらも、誘い段階、その内容、そして展開など目標達成への過程に楽しさを現出できた指導の展開が大きな要因をなしていると考えられる。

この楽しさとは何なのか。その楽しさを生みだしている要因は何で、どのような時・場面に生じているのか。ま

た、そのような楽しみを皆んなのものにするにはどのようにすればよいのか。できればその楽しさをより昇華させる方法はないのか。等々について、個々人が感じとっている感覚、意識を中心にして、調査による分析的研究を測っている。

今回は、児童が「運動する」ことに係わって、運動そのものの好嫌度合い、その意識を生じさせている要因、そしてその延長線上にあると思料される体育実技の好嫌度合いとその意識を生じさせている要因等について報告する。

### 調査の概要

調査の時期…昭和56年10月・昭和57年10月

調査対象…対象によって意識に片寄りがないかどうか。また、普遍性のある資料を得るために、次の地域別に

被験対象を区分して実施した。

また、これらの学校は、学習指導要領による領域別配当時間、その内容、到達度、学年配分等の学習指導の展開が似かよったところを選択した。

調査方法…質問紙によるものと口答によるものとの両方を併用した。

特に、担任の教諭による日常行動を加味した個別的な分析も考慮した。

### 結果と考察

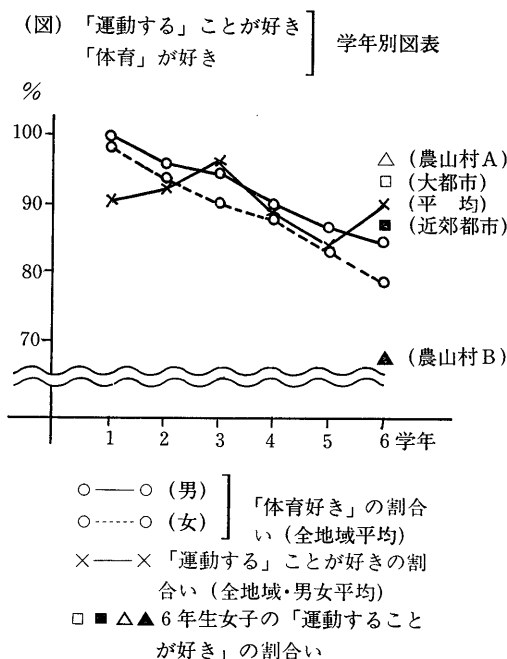
この調査が主として質問紙法によったことにより、児童から十分な解答を得にくいことも予測されるので、併行して直接に質問をし口答で解答を得る方法と同児童の担任教諭から補足の分析をしていただく方法とを用いた。

このため、若干ではあるが、これらの要素を含めて考察を進めることにした。

対 象 区 分	対 象 地 域	対 象 人 員
大 都 市 部	京都市・大阪市	四四五名（二校）
大都市近郊部	大阪市近郊都市	四六六名（二校）
農山村部 (A)	農山村部であるが 観光地など人の出 入のある所	五二一名（三校）
農山村部 (B)	過疎化傾向の著し い町	一二七名（二校）

# 一 児童の「運動する」ことの好嫌の実態

「運動する」ことが好きと答えた児童の学年推移は、一年・九〇%、二年・九三%、三年・九五%、四年・八九%、五年・八三%、六年・九〇%となっている（図）。一年の九〇%から三年の九五%へと「運動する」ことが徐々にではあるが好きになる傾向にあるにもかかわらず、四年・五年へと急激に減少の傾向を示す。このことを、逆



の視点である「運動する」ことが好きでなくなった理由からこれを分析してみると、器械運動的な運動即ち鉄棒・跳箱・マットなどを使った諸運動の中で、種目化（逆上り、閉脚飛越し・伸膝前転等）された運動を嫌う（四年で一七％）傾向を示している。また、同様の傾向としてボール運動や陸上運動などの領域の種目にもみることができ

る。

このことは、「運動する」ことの全体の中で、教科体育で学習した運動種目を取り入れられることや運動を主体とする遊びや活動も一定の形式化された種目が多くなることと符合する。「上手・下手」「できる・できない」「速い・遅い」「強い・弱い」が明確となる各種の運動が生活の中に入り込み、この優劣を軸にして「運動する」ことが嫌いになると思料される。

しかし、この傾向は六年になると一転して「運動する」ことが好きという方向に変わる。このことを聴聞方法によって得た事実でみると、最近之余り「運動する」ことが好きではなかったが、「先生を始め、自分の周囲に自分と

同じように十分にできない人の居ることを知って……」運動をしていると厭なことが忘れられるから。」など、積極的ではないが「運動する」ことの不安感の除去や意義を見つけ出した例が多くみられた。

以上のことは、大都市、近郊都市、農山村(A)(B)及び男・女ともに同様の傾向がみられた。ただ、農山村(B)地域の六年女子は、「運動する」ことが嫌いであるとする比率が他地域に比べて非常に高率を示した。このことを起生している理由は統計的には示せないが、教師集団の意見を集約すると、意識の増高が運動をひかえさせる形で表れているとみている。

## 二 児童の「教科体育実技」の好嫌の実態

「体育実技」が好きと答えた児童の学年推移は、男子で一年・一〇〇%、二年・九六%、三年・九三%、四年・九〇%、五年・八六%、六年・八四%と漸減の傾向を示し、ほぼ三〜四%の比率で平均して減少している。女子は、一年・九九%、二年・九四%、三年・九〇%、四年・八九%、五年・八三%、六年・七九%と男子と同様に漸減の傾向を示すが、特に三、四年を節目にして、一〜三年及び四〜六年の学年進行に伴う減少が著しい。(図)。

これを男女比でみると、すべての学年にわたって「体育好き」は男子に多いが、学年進行に伴って男女の「体育好き」に開きができて、六年になるとその差が五%にも達する。

以上の全体像とともに、「体育好き」を減少させている理由についてみると、①「できない運動が多い」②「同じ運動の繰り返しが多い」③「上手な人達を中心になつての活動が多い」④「先生は……」となっている。このうち、先生は……となっているのは、上位三位に入っている理由の他に、「しかられる」「苦しいことばかりさせる」

などを含めて答えている。

これらのことは、すべて体育授業の展開と係わる事象であり、体育授業のあり方が「体育嫌い」を生起させる原因を内包しているとみることが出来る。勿つとも、教育目標、体育目標に照らした体育授業の展開がなされるころであるが、ここに具体的に提起されている事象は、「できない運動が多い」——進度＋指導法、「同じ運動の繰り返が多い」——カリキュラムの編成＋指導法、「上手な人達が中心になつての活動が多い」——指導法＋展開、「先生は……」——カリキュラム編成＋展開＋指導となるが、これに携わるすべての事象は先生にあると言える。このように見てくると、「体育好き」を減少させる理由、即ち「体育嫌い」を生起させる理由は、授業展開のあり方を原点としたカリキュラムの編成、単位時間の展開、方法、形態、具体的な指導など指導そのもののあり方等に集約できる。

### 三 「運動」と「体育」の好嫌度の対比

一、二で述べてきたように、「運動する」ことが好きということと、「体育好き」という実態とに若干の違いがある。特に(図)に示すように、三年・六年では「運動する」ことが好きとするものが「体育好き」を上まわっているが、一年・二年ではその逆の実態にある。

先ず一・二年の「運動する」ことよりも「体育好き」が多い理由として、「みんなで一諸にできるから」「楽しいから」が、その主なものとしてあげられている。このことからみると、集団生活・集団学習など、幼児保育課程とは違った新鮮な学習場面での体育実技学習であるとともに、学習教材が「基本の運動」で特に楽しさを中心に構

成されているものが多く、その展開も楽しく活動をすることに重点がおかれていることに関連しているとみることが出来る。また、身につけている「運動」の種類の少なかった幼児が、学校体育実技によって多くの運動を身につけていく過程であることも相乗的に作用していると思われる。

次に、三年・六年における「運動する」ことが好きとする現象が、「体育好き」を上まわることについては、三年では運動の種類が広がり、その応用によって生活全体に楽しい運動場面が展開できるようになった反面、「体育」では①「できない運動が多い」②「同じ運動の繰り返しが多い」③「先生は……」④「上手な人達を中心になっての活動が多い」の順で「体育嫌い」の結果を生みだしている。これを六年でみると①「先生は……」②「上手な人達……」③「同じ運動の繰り返し……」④「できない運動が多い」という順になっている。このことは、「運動する」ことには興味があるが、体育の授業では「運動する」ことの興味を引きだしてくれないという形で受けとめているとみることが出来る。

#### 四 ま と め

「運動する」ことが嫌いか、「体育嫌い」を逆説的にとらえてみると、「自分の興味志向を生かしてくれない」「できないことをしなければならぬ」「優劣が明確になる」「展開が気に入らない」「はずかしいから」等々、児童が自分中心に考えて判断をしている理由が多い。しかし、「運動する」ことが嫌いなことと、「体育嫌い」を同一視することはできない。計画的・意図的に展開される「体育授業」と日常生活や遊びの中で「運動する」こととはおのずと本質の違うものとしてみるべきであるが、その関係を次のように要約することができる。



① 「体育授業」が「運動する」ことを嫌うことに加担している実態がある。

② 「体育嫌い」を生みだす要因の多くは、学習指導の展開と教材の選択とにある。

③ 「体育嫌い」は、経年化とともに漸増する傾向にある。

以上のように「運動」「体育」への児童期の志向は、「運動」のもつ諸機能を十分に生かした活動を求めているといえる。

今度は、生徒、学生、社会人のそれぞれの段階における志向を明らかにする中で、児童、生徒の求める体育授業のあり方の姿をつくりあげたいと考えている。

最後に今回の研究にあたり学会より多大の援助をいただきましたことを、深く感謝し、御礼申し上げます。

文学部教育学科助教授

小倉 美津子

